

# は じ め に

中部小学校教育研究会会長 藤 井 隆 弘

記録的な豪雪で始まり、未曾有の大震災、県内での大雨被害など大きな出来事の続いた1年が終わり、穏やかな天候の正月を迎えました。昨年を表す漢字一文字が「絆」でした。心の絆を大切にしながら、本年が平和で希望に満ちた1年となることを祈念しています。

子どもたちは学校という集団生活の中で様々な「学びの力」をつけています。「教育は人なり」という言葉もあります。教員の資質向上、現職教育の必要性が言われています。「確かな学力」と「豊かな心」、「健やかな体」などの「生きる力」の育成のため、私たち教師の力、教師力が求められているのです。教師力を高める場は様々ありますが、特に授業力向上に関わって本研究会の果たす役割は大きいものがあると考えます。

本年度は、「一人一人の個性を生かし、『生きる力』をはぐくむ教育活動の創造」を研究主題とし、子どもたち一人一人の可能性を生かすことや豊かな体験や活動を多く取り入れ、主体的に学ぶ単元開発と支援などについて提案させていただきました。これに基づき、各研究部が創意工夫をしながら取り組んでいただいたことと思います。

11月9日には、3会場（道徳は北条小学校、家庭は上小鴨小学校、社会は浦安小学校）で研究発表会が行われました。それぞれの会場では、研究部や会場校の研究主題にそった教育実践が公開されました。十分に練り上げられ、子どもたちが意欲を持って取り組む授業が展開されました。また、分科会では、研究目的に沿って実践された提案とそれを深める協議が真剣に行われました。発表にあたり、会場校と研究部が連携を取りながら準備や運営が行われました。研究部が主体となり会場校と共同研究活動を積み上げる形は、本研究会の特色でもあります。この場をお借りして関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

会員の皆様には、研究発表会で得られたものを実践し、自校に広めていただきたいと思います。また、この集録には各研究部の取組み経過やその成果、各研究部の会報も載せています。この研究集録を様々な形で活用していただければ幸いです。

本年度も「組織等検討委員会」を設置し、教育活動の改善に努めました。特に平成26年度で現在のサイクルが終わるため、平成27年度以降の発表会の持ち方をどうするのか話し合いました。結果的には「現状のままで実施(毎年3会場で3教科・領域の発表会を行う)」となりましたが、検討委員会では本会の在り方も含めて真剣な議論が交わされました。

本会を取り巻く状況にも大きな変化が起きています。学校の統合に伴う学校数の減や教科・領域の枠組み等の在り方など様々な課題も出ています。また、授業力・学力向上に伴う授業づくりで県教委等との連携といったことも話題となってきています。

学校教育の不易（集団生活を通して社会性や人間性を培い、知・徳・体のバランスのとれた児童を育成すること）を忘れることなく、時代の要請に応じた教育活動をしていくことが求められています。会員の皆さんの英知を結集し、中部小学校教育の充実発展に努めたいものです。

最後に、この一年間、ご指導ご支援をいただきました中部教育局、各市町教育委員会に感謝申し上げます。ありがとうございました。（平成23年度研究集録より）

## 今こそ教師としての力を高めよう

鳥取県小学校教育研究会副会長 藤井隆弘

子どもたちは学校という集団生活の中で様々な学びの力をつけていく。「教育は人なり」であり、教員の資質向上、現職教育の必要性が言われている。教師力（教師として必要な力）を高めることである。教師力を伸ばす場は、校務分掌、職員同士や保護者・地域の人とのコミュニケーション関係、自己研鑽（一人の人間として能力や人間力を伸ばす）等がある。教師力向上の大切なポイントには、授業を通して子どもと関わりながら指導力を伸ばすことがある。

教材研究、子ども理解、コミュニケーションスキル等を通じて子どもの力を伸ばしていくのである。授業への心構えの基本（時間：開始と終了・活動の保障、テンポや間：表情・語調・話しすぎない、プレゼン：わかりやすい板書、ICTの活用）等を大切にしながら授業づくりをしていくことである。また、授業を通して（1時間、1単元、1年間等）子どもたちにつけたい力は何かを常に振り返ることである。

教育的な情熱や真剣さを持ち、教育の道に入った私たちである。性分や感性は人それぞれ異なるが、研究と修養（行政研修、校内研修、自己研修、県小教研・各ブロック小教研の研修等）に努めながら、子どもたちのために今こそ教師として必要な力、教師力を高めよう。

「鳥取県小学校教育研究会会報第92号（平成23年度）」原稿より  
倉吉市小学校長会、研究テーマ（共通取組内容）～現職教育の「授業力、分掌力、人間力と校長の関わりについて」と関連して

# 中小研だより

## 動きながら、しっかり考えよう

各学校では新教育課程の全面実施に関わり、様々な教育実践を精力的に進めておられることと思います。外国語活動の新設、授業時間数の増、教科書頁数平均25%増、学校評価と教職員評価・育成制度のリンク、開かれた学校づくり、教員の資質能力の向上等々慌ただしい毎日であったと思います。「動きながら考えた」というのが実感ではないでしょうか。夏季休業期間を活用してこれまでの実践の振り返りをするとともに、教師力を充電して2学期からの教育活動に邁進したいものです。

不易と流行という言葉があります。学校教育の不易は集団生活を通して社会性や人間性を培い、知・徳・体のバランスのとれた子どもを育成することです。子どもに夢や希望を育ませ、知恵を発揮してたくましく生きる力を身につけさせることです。「生きる力」の育成は、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力のバランスのとれた力です。確かな学力には基礎的な知識・技能、自ら考え判断し表現する力、学習意欲等が大切です。集団生活の中で、協調性や思いやりや感動の心が育てられます。たくましく生きるためには健康や体力の育成が必要です。

昨今「地域との連携、地域に開かれた学校」が言われます。子どもは多くの人と触れあい、様々な場面を通して成長します。流行というのではありませんが、これまで以上に保護者はもちろん、ボランティアや地域の方々の力も活用しながら子育てをすることが大切です。子どもはまさに「地域の宝」なのです。

各研究部においても、教科・領域の特性を生かしながら生きる力の育成に向けてのさらなる取組みを期待しています。教育の本質を確認し、子どもとふれ合う時間を確保し、確かな学力と豊かな人間性、健康・体力を育成するために着実な歩みをしていくことが大切です。「生きる力」を育むための具体的な手立てをとることが肝要です。

こうしたことから中小研の果たす役割は大きいものがあります。現在、変革の波が中小研にも起きています。この波を乗り切るためには、教育の本質を大切にしつつ、より効果の期待できる体制及び活動内容にしていかなければなりません。

本年度も執行部及び各地域代表等16名で構成される「中小研組織等検討委員会」を立ち上げました。平成27年度以降の研究発表大会のあり方についてが主な内容です。このことは、研究の取組み及び運営に関係することでもあります。会員の皆様が自分自身の問題として関わりを持ち、積極的な意見交換の場となることを期待しています。

多忙であっても、先に見える、納得のできることであれば心地のよい疲労となります。会員の皆さんの英知を結集し、本会の主な事業である「教育課程の研究推進、教育の研究調査・発表、児童のための教育諸行事の実施」をすることで、中部地区の小学校教育の一層の充実進展を図っていきたいものです。

本年度の研究発表大会は、北条小学校(道徳)、上小鴨小学校(家庭)、浦安小学校(社会)を会場に行われます。関係研究部、会場校ともに周到に準備を進めておられます。研究部の取組みを受けて活発な議論がなされ、それが各校の取組みに反映することを期待しています。

中部小学校教育研究会 会長 藤井隆弘

(平成23年度会報より)

# は じ め に

中部小学校教育研究会会長 藤 井 隆 弘

現在、気になっている話題が2つあります。一つは、記録的な豪雪被害とその対応、もう一つは人気漫画の主人公を名乗るランドセルなど匿名寄付の全国的な広がりで

す。豪雪は県内でも大きな被害をもたらし、日常生活にも大きな影響を与えました。今後に向けた備えと対策はもちろん必要です。しかし、この豪雪に対して厳しい状況の中、献身的な努力や支援の輪があったこと、困難に立ち向かう様々な知恵や工夫も報じられ、関係者の主体的な活動と生きる力を感じ、心温まるものがありました。また、善意の匿名寄付については、人間関係が希薄になっている現在、心のつながりの大切さと大人の子ども達への期待や優しさというものを改めて感じました。

さて、本年度の中部小学校教育研究会は、「一人一人の個性を生かし、『生きる力』を育む教育活動の創造」を研究主題とし、子ども達一人一人の可能性を生かすことや豊かな体験や活動を多く取り入れ、子ども達が主体的に学ぶ単元開発と支援などについて提案させていただきました。これに基づき、各研究部が創意工夫をしながら取り組んでいただいたことと思います。11月10日には、3会場（体育は西小学校、図工は北谷小学校、国語は八橋小学校）で研究発表会が行われました。それぞれの会場では、研究部や会場校の研究主題にそった教育実践が公開されました。十分に練り上げられ、子ども達が意欲を持って取り組む授業が展開されました。また、分科会では、研究目的に沿ってしっかりと実践された提案とそれを深める協議が真剣に行われました。発表にあたり、会場校と研究部が連携を取りながら準備や運営が行われました。研究部が主体となり会場校と共同研究活動を積み上げる形は、本研究会の特色でもあります。この場をお借りして関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

研究発表会に参加いただいた会員の皆様には、それぞれの会場で得られたものを実践し、自校の職員に広めていただきたいと思います。また、この集録には各研究部の取り組み経過やその成果、各研究部の会報も載せています。この研究集録を様々な形で活用していただければ幸いです。

来年度は、新教育課程の全面実施の年です。2類研究部には外国語活動部が新設されます。ここ何年かの間に教育基本法や教育三法の改正などが行われ、教職員としてやるべきことがより一層多様なものとなっている感があります。しかし、このことは教育への関心の高まりや未来を担う子ども達への期待の表れだと考えます。学校教育の不易（集団生活を通して社会性や人間性を培い、知・徳・体のバランスのとれた児童を育成すること）を忘れることなく、時代の要請に応じた教育活動をしていくことが求められています。本研究会においても、本年度「組織等検討委員会」を設置し、様々な視点で教育活動の改善のために努めています。課題解決に向けて必要な点は、次年度も引き続き検討していくこととなります。会員の皆さんの英知を結集し、中部小学校教育の充実発展に努めたいものです。

最後に、この一年間、ご指導ご支援をいただきました中部教育局、各市町教育委員会に感謝申し上げます。ありがとうございました。

（平成22年度研究集録より）

英知を結集し、チーム力を高めよう

鳥取県小学校教育研究会副会長 藤井隆弘

記録的な大雪でスタートとした平成23年、豪雪に対する様々な対応が求められた。眼前の状況にどう対処するのか、自分は何をすべきか・できるかという知恵を働かせて行動することが大切である。今回も県内各地で、行政や住民の様々な努力・協力があった。人は、自助努力はもちろん他の支援を受けて力にかえることができる。教育現場においても新教育課程への対応、開かれた学校づくりのための諸施策など課題山積の感がある。県小教研でも、あり方検討委員会などで現状を見据えながら改善に取り組んでいる。

新春に行われるスポーツイベントの一つに箱根駅伝がある。大学生が約20キロを走り、10区間を一本のたすきをつなぐ。ただ走るだけなのに、なぜ魅せられるのか。もちろん走力のある選手が揃っていなければならない。大会に向けたコンディション作りも必要である。しかし、それだけでは不十分である。コースに合わせた選手配置(適材適所)、状況に応じた走り方(判断力・応用力)、選手の力を引き出す体制(チーム力)等々、様々な思いや条件が合わさって成果につながる。個々の力を結集して最高の成果を出せる教師集団としていきたい。

「鳥取県小学校教育研究会会報第90号(平成22年度)」原稿より

# 中小研だより

## 変革期こそ着実な歩みを

各学校では新教育課程の編成、実践に向けて取り組みを進めておられることと思います。外国語活動の新設、確かな学力を身につけるための授業時間数の増、教科書平均25%増量、学校評価と教職員評価・育成制度のリンク、開かれた学校づくりのための情報発信と情報収集、教員の資質能力の向上等々負担感を覚える話題が入ってきています。

不易と流行という言葉がありますが、学校教育の不易は集団生活を通して社会性や人間性を培い、知・徳・体のバランスのとれた児童を育成することです。子どもに夢や希望を育ませ、知恵を発揮してたくましく生きる力を身につけさせることです。この期だからこそ教育の本質を確認し、子どもとふれ合う時間を確保し、確かな学力と豊かな心を育成するために着実な歩みをしていくことが大切です。「生きる力」を育むための具体的な手立てをとっていくことが肝要です。

こうしたことから中小研の果たす役割は大きいものがあります。現在、変革の波が中小研にも起きています。この波を乗り切るためには、教育の本質を大切にしつつ、より効果の期待できる体制及び活動内容にしていかなければなりません。

昨年度、外国語活動部新設に関わって全会員へのアンケートを実施しました。その結果、「外国語活動部は、平成23年度新設をめざして検討する」とこととなりました。しかし、アンケート結果から外国語活動部の新設にとどまらず、いくつかの課題が浮かび上がってきました。

そのため、本年度執行部及び各地域代表等14名で構成される「中小研組織等検討委員会」を立ち上げることとなりました。協議内容は、研究部のあり方（外国語活動部の新設を含む）、研究発表会のあり方（平成26年度で現在の発表会のサイクルが終わります）、研究部の活動について（各部の集録や括弧書き部員の関わり方）等です。学習指導要領の改訂、少子化・学校統合等による環境の変化等々変革を必要とする状況もあります。県小教研、市・町初研、関係教育団体等とも連携をとりながら取り組みを進めていくことが大切です。

すぐ解決できること、ある程度時間のかかること、中小研内部だけでは解決が難しいこともあると思います。委員を中心として、会員の皆さんが自分自身の問題として関わりを持ち、積極的な意見交換の場となることを期待しています。

多忙感でも先に見える、納得のできることであれば心地のよい疲労となります。会員の皆さんの英知を結集し、本会の主な事業である「教育課程の研究推進、教育の研究調査・発表、児童のための教育諸行事の実施」することで、中部地区の小学校教育の充実進展を図っていきたいものです。

本年度の研究発表大会は、西小学校(体育)、北谷小学校(図工)、八橋小学校(国語)を会場に行われます。研究部、会場校ともに周到に準備を進めておられます。研究部の取り組みを受けて活発な議論がなされ、それが各校の取り組みに反映することを期待しています。

中部小学校教育研究会 会長 藤井隆弘  
(平成22年度会報より)